

残像抄(2)

— 大正初期の代々木山谷・クツワムシ —

大和文華館 館長 石澤正男

夏の暑さでは他の都市に較べてめったにひけをとらない奈良市ですが、この「たより」が皆様のお手許に届く頃には、朝夕もやや涼しく、凌ぎやすくなっていることと思えますし、いよいよ秋の鳴く虫の季節に入りますので、この号では私が少年時代から青年期に達する時期を過ごした東京の代々木界限を回想したり、子供の時から好きな秋の鳴く虫、即ち昆虫学という直題目に属する虫の中から、この頃ほとんど聞かれなくなったクツワムシを扱った美術品の二、三を御紹介してみたいと思います。

私が東京の代々木山谷に一家と共に北海道から移り住んだのは明治44年の晩秋でした。今ではこの辺は東京都の23区の一つである渋谷区の一部ですが、当時はまだ豊多摩郡の一部で、割に都心に近い郊外のゆったりと落ちついた住宅地になっていました。しかし近所には牧場がいくつもあり、少し離れたところには畑と田圃が広々と続いていて、のんびりした田園情緒には十分恵まれていました。生来声の美しい小鳥や虫の大好きだった私には、北海道生活で経験した海や溪流での楽しい遊びには遠く離れてしまいましたが、それでも当時の代々木界限は私に満足を与えてくれる自然環境が十分残されていました。殊に代々木山谷と地続きの陸軍の代々木練兵場と、それに隣接し、頑丈な孟宗竹の竹矢来で囲まれていた御料地、これは現在の明治神宮の境内の大半を占める官内省所管の土地でしたが、この両者を合せると恐らく百何十万坪となり、武蔵野の景観を一番よく保存していた広大な地域でした。御料地内へは竹矢来があるの

ではいれませんが、その中に竹矢来が破れたままになった場所がいくつかできて、吾々は恐る恐る中へはいったものですが、さすがに御料地だけあって別天地と違ってよく、芝生の上には、あちらにもこちらにも野兔の丸い小さな糞が散乱しているのに驚いたものです。人の話では狸はもちろん狐もいるということでした。小鳥も沢山いました。

その頃代々木山谷には小説家の田山花袋(1871~1930)が早くから住み、その向いには洋画家の南薫造(1883~1951)の家があり、どちらも夭逝を惜しまれた天才画家、日本画の菱田春草(1874~1911)と草土社の中心人物岸田劉生(1891~1928)も山谷の住人でした。特に劉生は私の隣家に住み、彼を敬慕する草土社の若い画家達も暫くその附近に居を構えていました。いずれもまだ不遇時代で、イーゼルとキャンパスをもち絵具箱を肩にしてあの辺の風景を描いていた姿が目には浮かびます。菱草の最高傑作とされる「落葉」—永青文庫蔵—(重文)は練兵場の一角にあった雑木林から画想を得たといわれていますが、練兵場を除くこの辺一帯は宅地の増加で次第に変わりつつあったところへ、敗戦後早々に占領軍が進駐してきたため、練兵場は全く変貌してしまいました。

その頃の東京の初夏の風物詩の代表的なものは苗売り、金魚売りと虫売りといってよいと思います。苗売りと金魚売りはどちらも天秤棒で荷を担ぎながら街を流すのですが、苗売りの口上は一番長く、それをのどかな抑揚と独得の節廻しで歌い流してゆくのは風情のあるものでした。虫売りは流し

て売り歩かずにところどころに屋台をおりして、口上は虫の音にまかせるやり方でした。この風習は太平の江戸時代から明治・大正と伝えられてきたわけですが、近頃のように自動車の氾濫する往来では、こんなおんびりした商売はもう見られなくなってしまったかも知れません。今では百貨店にゆけば苗でも金魚でも、甲虫、蛭、すずむしその他なんでも手に入る時代ですから。

ただ読者の注意をとめていただきたい点は、昔からの虫売りが売りに来た鳴く虫は、自然界では夏から秋にかけて鳴くものを、人工飼育して晩春から初夏に鳴かせるようにした商売だ、ということです。東京に出てきて始めてこの季節はずれの虫売りにであったのは大きな驚きでした。いわば季節の前どりで、現在のように温室やビニール・ハウス栽培の野菜や果物が市場に溢れている時代から見れば、なんでもないとはいえるかも知れませんが、しかし日本人が昔から美声の持主の昆虫をいかに愛していたか、非常に愛していたからこそ長年の苦心と実験の結果、多種類の鳴く虫の人工飼育に成功するに至ったのであると考えますと、吾々日本人の心に潜む奥ゆかしい民族意識に敬意を表したくなります。

昆虫の人工飼育が日本以外ではどのような国々で行われていたかという問題は、私としては特に調査したことはありませんが、あの博学なドイツ系アメリカ人で、シカゴの自然史学博物館の人類学部長を長らく勤め、中国文化史の権威であった故バERTOLD・ラウファー(Berthold Laufer 1874~1934)



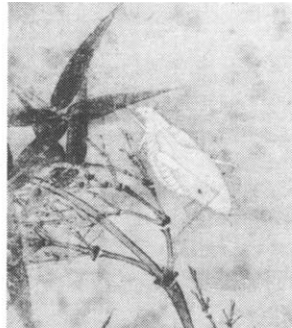
(1)虫売り 鳥居清長筆
東京国立博物館所蔵

博士の多数の研究発表の中に「中国の昆虫音楽家とエンマコオロギの選手たち—Insect-Musicians and Cricket Champions of China」と題した興味深い小冊子があり、中国にもこの種の昆虫の人工飼育が昔から行われていたことが判ります。私がCricketをことさらエンマコオロギと訳したのはラウファー博士の記述と使用されている写真から断定したのです。中国人がエンマコオロギを楽しむのは単に鳴き声を楽しむのではなく、闘争性のあるこの虫どうしを格闘させて、その優劣を競うのが目的とされていて、日本人の趣味とはほど違いものです。ただ面白いと思われるのは、各自が自慢の虫をいれる容器に趣好をこらし、象牙、玉、陶磁を材料に加飾を工夫し、その他に特殊な栽培法で外部に複雑精緻な陽刻をつけた小型瓢箪等とそれらに対応する入念な細工を施した蓋をつけたものを運搬用に使うことでもあります。この種の容器は立派な工芸品といえるもので、海外の美術館では往々見かけますが、日本ではほとんど見かけないようです。この話は深入りすると長くなりすぎますので、この辺で打ちきることになります。

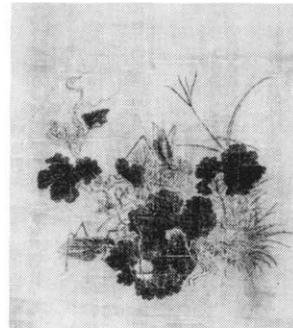
大和文華館の周辺にはマツムシその他多種類の美声の持主がおりますが、スズムシ、カンタン、クツワムシはおりません。高原に住



(2)青花双鳳草虫図八角瓶
松岡美術館所蔵



(3)竹虫図(部分)
東京国立博物館所蔵



(4)瓜に嚮虫図 伝銭選筆
正木美術館所蔵

むカントンは望めませんが、スズムシとクツワムシは是非欲しいと希望しています。スズムシはやさしそうですが、クツワムシは容易ではないかもしれません。

クツワムシは直翅目のキリギリス科に属し、この種の中では体長(触覚を除き)が5cm位はある大型で、音量も抜群、他の虫を独奏者にとえたとクツワムシは一匹でオーケストラを演奏しているほどの差があります。その名の由来は更めていうまでもなく、馬具の鉄製の嚮(くつわ)を打ち鳴らして発する雑音の連想からつけられたもので、俗にガチャガチャといわれているのもそこからきています。平安期の才女清少納言が「枕草子」の中で音楽や楽器にふれているところに、笛では横笛を絶讃し、竽(ひちりき)をこきおろして、秋の虫なら嚮虫みたいで、身近にはきくにたえない、といっていますが、しかし離れてきくと、この虫ほど音量が大きいばかりでなく、繊細なリズムをもった虫はないと思います。また非常に神経が鋭敏で、どんなに高音で鳴いている時でも、何物かが近づくとぴたりと鳴きやむのは不思議な位です。それを利用してクツワムシの籠を庭先に置いて泥棒よけにするという効用があると伝えられています。この話をアメリカの友人にしたら、彼は大きな目を

丸くして「日本人は不思議な民族だ。静寂(Silence)が目覚ます原因になるとは驚いた。」といました。

(’79—8—1)

〔写真説明〕

(1)虫売り。鳥居清長(1752～1815)筆錦絵。(風流四季の月詣 風流月)と題された揃物の一つで、吉原中町での虫売りの情景。左が虫売りの男。右の二人は吉原の遊女。虫売りの屋台にはいろいろ形の変った虫籠があり、屋台の右側に「むしいろいろ」と大字で書き、正面には「まつ虫、すずむし、くつわむし、ひぐらし、ほたる」と書いてあります。東京国立博物館所蔵。

(2)青花双鳳草虫図八角瓶。元時代の美しい染付で総高45cm。中央の菱花型の中に葡萄に囲まれてくつわ虫が描かれています。東京・松岡美術館所蔵。

(3)竹虫図(部分) 絹本着色。99.7×54.8cm(筆者不祥)、元時代。曲りくねった竹を中心に多種類の昆虫を配しているが、その中にくつわむし(雄)が美事に描かれています。東京国立博物館所蔵。

(4)瓜に嚮虫図(部分) 絹本着色。29.2×27.1cm。伝銭選(1235～1290?)筆、元時代。(3)と同様元時代に流行した院体画風の生彩に富んだ描写です。大阪・正木美術館所蔵。

季刊 美のたより No.48

昭和54年 8月29日

発行 大和文華館